
遙か樂園のその先で

藤綺呉羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遙か楽園のその先で

【Nコード】

N9751S

【作者名】

藤縞呉羽

【あらすじ】

シキが起きたらそこは彼女が毎日プレイしていた大人気VRMMORPG『アルカディア・オンライン』の世界だった。それもプレイしていた時代よりも未来の……レベル・ステータス・装備共に最強レベル。生活していく上ではそう困らないし、何よりも頼もしい仲間がそこにいた。ただ、問題は現実では女なのに、ゲーム内でのシキの性別は男だった。精神面はノーマル寄りですが、全体的にB Lです。

アルカディア・オンライン。

それは世界最大手ゲームメーカーが開発したオンラインゲームで、いわゆるVRMMORPGと呼ばれる存在。

基本的な王道の剣と魔法の世界で、このゲームでは様々な種族があり、獲得したスキル経験値を使って技能を極めて行く極々簡単なスキル制ゲーム。

しかし、このゲームの最大の魅力はプレイヤー一人一人に割り振られたストーリークエストだ。

プレイヤーのレベルが50、100と各50ずつあがっていくことに運営側からストーリークエストとして強制イベントが発生する。このイベントは一人でこなしたり、パーティでこなしたりと様々。そして、一定の確率で最悪特定条件というものが付加される場合がある。これはレベル300以上の者のストーリークエストで、ソロの場合は時間制限があったり、パーティの場合はダンジョン攻略で自分以外のプレイヤーのレベルは半分以下の者を連れて行くことなど、こちらも様々。

これらをこなすと運営側から参加者全員に報酬と、担当プレイヤーにレアアイテムが支給される。

そしてもう一つの特徴として、ある一定のレベル以上の者に与えられる特権がある。とはいっても、その一定のレベルはゲーム上で設定されている最高レベルの1400。現在300万人を超えるプレイヤーの中でも10人ほどしかない。

その10人にはマスターというクラス称号と、マスタークラス特定のカエストをクリアすることによってさらにレベルが100上げられること。一人しかねない各種族の最強種へとステータスそのままに転生出来ること。【ホーム】と呼ばれる専用の拠点を与えられること。

ただ、転生クエストに関してはマスタークラスでさえ難易度が高く、なおかつ条件がソロプレイなため、現在は三人しか転生していない。

以上の特権が与えられる。特に最後の【ホーム】機能はプレイヤー垂涎の的だった。

アイテムボックスは収納数が上限50までと決められている。これでもかなりの収納数だが、武器・防具・道具そのすべてを含めて上限50なので、プレイヤーは50を超えた場合は捨てるか売るか所属ギルドの倉庫にお金を払って専用スペースを作るしかない。ただし、その専用スペースも収納上限30まで。

これに対して、マスタープレイヤーの【ホーム】は違う。マスタープレイヤーの意志一つで、【ホーム】に収納してあるアイテムと入れ替えが可能。収納数も上限がなく無制限。

また、プレイヤーは怪我や状態異常により体力及び魔力の減少を回復するには、魔法もしくはアイテム使用。さらには宿屋に宿泊し

ての回復、教会で神官による【神の奇跡】と称され瞬時に体力を回復する。どちらもお金がかかり、特に後者は宿に泊る倍のお金がかかる。

マップ間の移動やダンジョン攻略時に宿屋も教会もないため、魔法とアイテムが必須になる。しかし、マスタープレイヤーは専用の指輪によりいかなり時でも【ホーム】への帰還が可能になる。【ホーム】は建物自体に【神の奇跡】と同等の効果があり、そこにマスタープレイヤーが帰還すると瞬時にマスタープレイヤーの体力と魔力は全回復する。

【ホーム】さえあれば、いかなる時でもアイテム収納・切り替えや体力回復に困ることはないのだ。だからこそ、数多のプレイヤー達はマスターになるまでやり込み続ける。

目を覚ますと薄汚れた茶色い天井が見えた。

「……………なんで？」

上半身を起こし周囲を見回すと、小さなテーブルと椅子。立てかけられた姿見。

明らかに本来の自分がある部屋ではなかった。

「おかしい。五時間以上行動しない場合は自動ログアウトの設定しておいたはずなのに……」

眉を顰め、自身のステータスを確認すると同時に、姿見に全身を映す。

「やっぱりシキ、か」

濃藍色の髪色に、転生者だけが持つ金色の瞳。

『シキ / LV1500 / 種族・始源竜 / 称号・マスター』

他にも体力値や魔力値、攻撃力や防御力などRPGの王道ステータスが脳内表示されているが割愛する。

「それにしても……なんか、いつもよりアバターの感触が生々しいというか……」

ぺたぺたと自分の体に触り、その手が股間に伸びた所で止まる。

「ん？ んんっ？」

やけに肉感的な感触。

そつと下に目をやり、備え付けのトイレに駆け込みシキは声無き悲鳴をあげる。

数分後、ぐったりとした様子でベッドに座りこむシキの姿があった。

「ありえない……まさか、今流行りの異世界トリップとかいう奴？あれは女子高生の特権じゃないわけ？」

目の前にある姿見に再度目をやり、大きなため息をつく。

「シキつてことは、ここはアルカディア・オンラインの世界で間違いはない。そももってアバターがシキだからここでの性別は男。いや、アレもあつたから男で間違いはなし……なんでアバター男にしたんだ、自分」

シキの現在の性別は男。だが、現実世界でシキは黒羽四季という名の女性だったのだ。外見は彼、中身は彼女。複雑ではあるが、それでもゲーム内ではうまくやっていた。むしろ、男として振舞っている方が時々楽だと思っくらいには。

「……悩んでも仕方ない。今まで通りプレイすればいいだけだよね」
現状確認とばかりに、手持ちのアイテムや装備、スキルなども確認する。

「ほとんど変更点はなし。【ホーム】のほうも健在、と。こうして見ると、マスタークラスって本気でチートだな。けど、マップがないのは痛いな」

現在位置の確認をしようとするが、どこを探してもマップは見つからなかった。【ホーム】にも存在していない。

「仕方ない。ギルドにでも寄って買うか」

ボックスに仕舞っておいた装備を取り出し着替える。

シキの現在の職業はサムライ。武器は刀、防具は籠手、ブーツ、陣羽織風コート、インナー、ズボンと和洋折衷。

はっきりいえば、防具は防具とはいえない。鎧などが一切ないのだから。

だが、装備のレベルとしては竜族装備の中でも最強レベル。シキが始源竜に転生を果たした時に運営側から与えられた装備で、始源竜しか装備出来ない代物。

月白色の刀身をした刀。

紺青色の陣羽織風コート。

黒に刀と同じ月白色のラインの入った籠手。

インナー・ズボン・ブーツは全て黒。

防具指定されている衣装の全てが、鎧と言っても過言ではないほどの防御力を誇っている。

元々シキはサムライ職の中でもスピードに特化したタイプだった

ので、下手に鎧があるよりもこの程度の方が動きやすく好きだった。

着替え終えて部屋の扉を開けると廊下があり、奥には下へ向かう階段とさらに上に上がる階段がある。

「よくある宿屋の光景」

下に降りるといくつかのテーブルが立ち並んでいる。酒場や食堂と宿を兼任している所は多く、シキがいるところもそれに当たる。

「すみません」

「はいはい」

恰幅のいい女性がシキの呼び声に応える。

「朝食をお願いしたんですが。それと、この周辺のマップがあれば」

「朝食はいいけど、マップは王都内であればあるけど、街の外ともなるとギルドに行かないとねえ」

「わかりました、ありがとうございます」

「いってことよ。飲み物はどうする？」

「紅茶をお願いします」

「あいよ」

数分後にはほくほくと湯気の出たスープに、野菜と肉を挟んだベーグルサンド。デザートのジャムつきヨーグルトに紅茶が出てくる。ベーグルサンドを口に含むと、肉が柔らかいせいとか口の中で程よく溶けていくかのようで、シキの舌を満足させた。

「うまっ」

「ははっ、そう言ってくれるとうれしいねえ。兄さんは冒険者かい？」

「ええ、まあ。しばらく家に閉じこもってたんで、久々に外に出ようと思つて。あ、ちなみにこの街何て言うんですか？」

「そんなことも知らないで来たのかい？　ここは帝都・ヴァラスキヤルヴだよ」

（ヴァラスキヤルヴ？　ってか、帝都のどこの帝都？）

「帝都って、ここどっかの帝国なんですか？」

「重症だねえ……ここはアスガルズ帝国。アスガルズ帝国の名前からいはいは知ってるだろ？」

「ア、アスガルズ帝国！？　え、ちょ、アスガルズって王国じゃ……」

「何言つてんだい。ここが王国だったのは500年前までだよ。あんた、もしかして長命種かい？」

「……」応竜族です」

「ああ、それなら仕方ないかもしれないねえ。どうやら兄さんが閉じこもっていた時間は結構長かったみたいだ」

「そう、みたいです」

その後は女将に様々なことを聞きながら、シキはこれからのことを考えるべく取った部屋へと戻っていった。

01 (後書き)

新作始めました。

一度は書いてみたかったTSでBL。

メインキャラが一通り出てきたら人物紹介つけます。

宿の女将からサービスしてもらった王都内の地図を広げ、宿の位置とギルドの位置を確認する。幸いなことにギルドは宿からそう遠くはない場所にあった。

しかしここでまた問題が勃発。

シキはギルド登録をしていたが、それは今の時代から500年前のギルドだ。当時のライセンスカードが今も通用するとは考えにくい。

「そういえば、一応カードの期限は5年だったよな……この制度は今でもあるのか？ だとしたら完全に期限切れか」

そう結論に達したシキは一番初めから登録し直すことにした。

「せっかくSSランクまで上げたつつうのに……」

大きなため息をつきながらも、決意を新たにして立ち上がろうとした時、耳に何かのコール音が届く。

「この音……シークレットチャットのコール音！」

アルカディア・オンライン内にはいくつかの専用回線があった。いわゆるチャット機能である。ギルド登録者全員が情報交換するためのギルドチャット、パーティを組んでいる者だけが見れるパーテ

イチャット。プレイヤー全員が見れる公開チャット。

そして、特定の人物とだけ会話するシークレットチャット。

シークレットチャットはその名の通り秘密回線で、他のチャットと違い、フレンド登録している中でもお互いの意志が尊重され、運営側に申請して初めて開かれるもの。さらに、このチャットにはパスワード登録が必要となる。

シキは二人のプレイヤーとシークレットチャット登録をしていた。

「まさかまさか……！」

慌てて機能を立ち上げると耳にとてもよく馴染んだ声が届く。

【シキ！？ お前シキか！？】

【ゼロ！】

【うそっ！？ 本当にシキですの！？】

【リュイ？ リュイもいるのか？】

【はい】

【よかった。お前とも連絡が取れて……相棒のお前がないなんて考えたくねえよ……】

【オレも。ゼロがいてくれてすげえうれしい】

【シキ……】

【あらあら、わたくしを忘れないでいただけませんか？】

【忘れてなんかいないって。オレはリュイもいてくれてうれしいよ】

【わたくしもシキがいてうれしいです。それにしても、このラインが通じると言うことは、シキはわたくし達が知ってるシキでよろしいのですね？】

【アルカディア・オンラインプレイヤーのシキ、だよ】

【よかった……ゼロとシキ以外のマスターには連絡が取れず、運営にメールを送れずログアウトも出来ずで本当に困りましたわ】

【お前のそれは困ってるように聞こえねんだよ。それはそうとシキ、お前今どこにいるんだ？ オレとリュイはヴァラスキャルヴとかいうところにいんだけど】

【オレもそこにいる！ ハティって宿屋の201！】

【今すぐそこに行く】

【すぐに参ります】

ぶつっと同線が切れる。

シキは目を瞬かせてから、ほおっと安堵の息を吐いた。

少なくとも、シキの中では知っている人が二人いる。それも、ゲ

ーム内で一番信用かつ信頼していたプレイヤーだ。

「よかった……ゼロとリュイがいれば安心だ」

同じマスタークラスのプレイヤーであり、自分と同じように転生を果たした二人。

特にリュイはシキが現実では女性だと唯一知っているプレイヤーで。リアルでは会ったことはないが、ゲーム内では一番親しい友人だと言っても過言ではない。

対してゼロは唯一無二の相棒だ。シキがゲームを初めて一番最初に仲良くなりコンビを組んだプレイヤーで、大体はログインすると行動を共にし、クエストをこなしていった。パーティを組むとなると、二人にリュイが加わるといふ形を取ることが多かった。

だからこそ、ゼロとリュイはシキにとって大切な友人たちだ。

数分後、扉の外から誰かが駆け上がってくるような音がし、バタンツと音が立つくらい強い力で扉が開いた。

「シキっ！」

「ゼロっ」

目の前の青年に駆け寄ろうと、立ち上がりかけたものの、それ以前に青年の方が急ぎ足で駆け寄ってきてシキの体をきつく抱きしめた。

「シキ……！」

「オレはここに居るぜ、ゼロ」

腕の力を緩めて青年　ゼロ　は切なげな顔でシキの髪を撫で、そのまま手を下ろし頬を撫でた。

シキの目に自分と同じ黄金の瞳と、夜よりも深い漆黒の髪、アバターだとわかっていても端正な顔が映る。

「会えてうれしいぜ、シキ」

言いながらゼロはシキの頬に軽くキスを落とす。最初は戸惑ったが、これが彼のスキンシップの形だと思ふと慣れたもので、シキも同じように自分よりも長身の彼の頬に唇を押しつけた。

「ああもうっ、ゼロに負けましたわ!」

「リュイ!」

肩で息をしながら、プラチナ色の髪と金の瞳を持った少女が二人を見つめていた。

「シキ、再び会えてうれしいですわ」

「オレもうれしいよ、リュイ」

二人は軽く抱き合い、額を合わせて笑った。

「それじゃ、ゼロとリュイも自動ログアウト設定していたはずなのに、目を覚ましたらここにいたんだ」

「ええ」

「自動ログアウトなら、時間忘れて寝坊なんてこともないしな」

「他のマスター達は？」

「あいつらは全員俺より先にログアウトしてった」

「そうでしたわね。わたくし達はその後チャットして、どうせ自動ログアウトするからと言ってその場で寝てしまいましたものね」

「アレがいけなかったのか……」

シキは頭を抱える。だが、どう考えてもその行為が原因としか思えない。

何らかの事象が三人の身に同時に起きて、結果三人まとめてゲーム内に実在のキャラクターとして取り残された形になった。

「問題はアレだな。ここが俺らの知ってるアルカディア・オンラインの世界じゃなくて、500年後の世界ってとこだな。ギルドのライセンスカードは使えねえ、金だっけ使えるかどうか微妙な所だ」

「金は大丈夫だ」

「シキ？」

「お前らが来る前に宿の女将さんにいろいろ聞いたんだよ。金・銀・銅の貨幣は変わらず。ただ、金の上に晶貨っていうのが出来たらしい」

「名前からして水晶か？」

「たぶんな。透明で何か紋章が入ってるらしいぜ」

「ゼロとシキの手持ちはどれくらいありました？」

「あー……金貨は六桁、銀貨と銅貨はほとんど使わなくなっちゃったから四桁で止まってるな」

「オレも同じようなモン」

「わたくしもそれくらいですわ。ひとまず、暮らして行くのに金銭の心配をする必要はありませんわね。ここに来る時に見た感じ、他の人々はNPCが人間になったという感じでしたから、わたくしたちのようにボックスからお金や物を取り出すといった行為はないでしょう」

「つーことは、俺らがボックスから取り出すと何も無い所から物を

取り出したってことになるのか」

「たぶん」

「そのあたりは適当に説明すりゃなんとかなるだろ。さて、これからどうする？」

「オレはギルドに再登録しようと思う。場合によっちゃ学校に通ってもいいし」

「それが妥当か……ま、シキがいりゃ俺はそれでいいしな」

「そうですね。シキがいればわたくしもいいですわ」

「お前らはいつもそうだな。別にオレを気にしなくてもいいんだぜ？」

「何言ってるんだ。俺はお前の相棒、俺以外の誰とコンビを組むつもりだ？」

「そうですねよ。わたくしはシキと百歩譲ってゼロ以外とはパーティは組みたくありませんわよ」

「んんっ？ オレはゼロ以外とコンビは組みたくないし、パーティだってゼロとリュイがいれば満足だけど？」

何も関係性は変わらないのだから、好きなように行動していいと言ったはずなのだが、シキの解釈と二人の解釈は違っていた。しかし、シキの答えで二人の周囲に漂っていた怒気が霧散していく。

「シキ、三人一緒が一番ですわよ？」

「そうそう。俺らと一緒にが一番。違うか？」

シキは首を振る。

シキにとっても、ゼロとリュイがいるといたいのでは全然違うのだから。

「じゃあ、これからもよろしく。ゼロ、リュイ」

笑顔で言うシキに、二人もまた笑みを浮かべるのだった。

マップに従って歩く三人の姿は周囲の目を惹いた。

三人とも目を攫うほどの端正な顔立ちをしており、女性の視線はシキとゼロに。男性の視線はリュイへと向けられている。最初は。

だが、明らかにゼロとリュイが真ん中にいるシキに対してアップロ―チ染みた行動を取っていくので、次第に男女問わず嫉妬の視線がシキへと向けられていく。

(オレにそんな視線向けられても困んだけど……)

思わず肩を落としたくなるくらいの強烈な視線の嵐。視線で人が殺せるなら、間違いなくシキの息の根は止まっている。

現在の体勢。

ゼロの腕がシキの腰へと回され、リュイが自分の腕をシキの腕に絡めている。

「あのさ。二人ともすごく歩きづらいから、手え離してくれない？」

「いや」

「即答かよ」

離す気の欠片もない二人に、シキは大きいため息をついて最終的

に諦めた。

通行人の視線をないものとして、無心でギルドまで歩いて行く。

街並みは、三人がプレイしていた時代とそう変わってはいなかったものの、広さは格段に広くなっており、中央に位置する城は遠目から見ても大きいと言えるほど。

「お城ってこうなんて無駄にでかいんだろうな」

「そっぴや城落としなんてクエストあつたな」

「ありましたわね。わたくしたちは参加不可でしたけど」

「あれ、おもしろそうだったんだけどなあ……」

ギルドクエスト、ストーリークエストの二つに加え、運営側が特定のプレイヤーに対して強制かつ突発的に発生させるクエストがある。

プレイヤーは強制イベントと呼んでいたのだが、その一つにレベル1000以上のプレイヤー全員に発生した強制イベントがあった。

その名が『城落とし』と呼ばれたもので、運営側が指定した国に傭兵としてプレイヤーを配置し、敵対国を攻め落とす戦争イベント。

最後に残った国に所属してプレイヤーにレアアイテムもしくはレアスキルが与えられた。

マスタークラスの面々は一人一人のステータスが半端ないため、

戦局のバランスを崩しかねないという理由で参加不可だったのだ。

「わたくし、あの後腹が立ってマスター全員と残りのプレイヤーのガチンコバトルクエストを運営に申請したのですが却下されてしまいました」

「そりゃ却下されんだろ。っーか、さすがにマスターといえども対クラス外プレイヤーっーのはきついぞ」

「オレ、運営が却下してくれて助かったと思う」

「楽しそうだと思ったんですもの」

「あ、ここだギルド」

三階建ての建物の扉を開けると、様々な種族で溢れていた。それらを軽く眺めてから、受付と思われるカウンターへと足を向ける。受付には赤毛をした猫族の女性が立っており、にっこり微笑んで三人を迎えた。

「冒険者ギルドへようこそ、本日は何の御用事でしょうか」

「ここに冒険者として登録したいんですけど」

「冒険者志望の方ですね。それでしたら、まずは此方の用紙に名前と種族をお書き下さい」

三枚の羊皮紙とボールペンを差し出される。

(羽ペンじゃないのか……)

中世ヨーロッパのような雰囲気を放っているのに対し、所々に現代の科学技術に通じる部分も見て取れた。

シキは朝食を取る際に、厨房内にオーブンレンジと思われる物や冷蔵庫思われる物があるのを見ていた。聞けば魔法具の一つで、中に魔石が入っているとのこと。

シキの中では魔石＝電気という結論に達している。

(種族……普通に書いたらやばくね?)

最強種に転生しているシキ達。普通にその名前を書くこと争いごとを招きかねない。

シキの始源竜。

ゼロの魔王。

リュイの妖精女王。

この三種がこの時代ではどう扱うのか、皆目見当もつかない所なのだ。シキはシークレットチャットを開く。

【二人とも、種族は転生前の書いた方がいいと思うんだけど、どうかな】

【俺もそれを考えてた。下手に書くとなんか目にあつかわかんねえしな】

【そうですね。特にゼロは最悪討伐対象になってもおかしくありませんもの】

【一応、魔族の冒険者がいたから大丈夫だとは思っけどな】

【じゃ、そういうことで】

チャットを閉じて、三人はそれぞれ転生前の種族を書いて女性に差し出す。受け取った女性は羊皮紙の上に、カウンター下から取り出した無色透明の宝石を二つずつ置いて何か一言唱える。すると、羊皮紙が一瞬で消えてなくなる。まるで宝石の内側に吸い込まれてしまったかのように。

「では、こちらの石に少量で構いませんので魔力を流し込んでください。それによって皆様専用の魔宝石が出来あがります」

（なるほど。魔力の質は個人個人で違うから、個人情報の特定みなくなるわけか。魔法ってある意味マジですね……）

他者に悪用されないよう、魔宝石は自身の魔力にしか反応しないようになっているのだと女性は言う。一つはギルドで保管され、特殊な魔法によって一つに精製されるのだと言う。

（ファンタジー版個人情報保護法だな。これだったら盗まれても個人情報が晒されることもないから安心してことか）

三人がそれぞれ魔宝石に魔力を流し込むと、無色透明だった魔宝石が色を持つ。

シキは黄金。ゼロは漆黒。リュイは白銀。

「それでは次に……」

言いながら女性は粘土のような平面状になっているものを取り出し、三人に魔宝石と一緒に手に乗せるように言う。その指示に従うと、魔宝石と粘土もどきが発光し形を変えていく。

光がおさまると、シキの左手に黄金の魔宝石のついたピンキーリング。ゼロの右手に漆黒の魔宝石のついたピンキーリング。リュイの左腕に白銀の魔宝石のついたブレスレットがそれぞれついていた。

「それぞれご本人様仕様になっておりますので、失くした場合の再発行には金貨五枚かかります。ご了承ください。続いてギルドのシステムについて説明させていただきます」

「ギルドのシステムは500年前と変化なしか？」

ゼロの問いに女性は僅かに考えてから頷く。

「大まかな部分には変わりありません。ですが冒険者ランクが変更になり、SS・S・A+・A・B+・B・C・Dの八階級になりました」

「なるほどな。どうする、変化しないなら飛ばすか？」

「いや、念のため聞いておきたい」

「お前がそう言うなら」

「すみません、続きをお願いします」

「かしこまりました」

ギルドへの依頼は壁一面の掲示板にランク毎に貼ってあり、受けてみたい依頼がある場合は依頼書を掲示板から取ってカウンターに提出。依頼の再確認をした上で初めて契約が成立する。

依頼終了後はカウンターに終了報告をする。こちらでも終了確認が取れたら依頼終了と認められ、報酬が支払われる。

アイテム採取や討伐依頼などはアイテム提出や、討伐モンスターの一部を提出することで依頼完了とする。また、荷運びや護衛などは対象者から依頼完了の証を受け取り、それをギルドに提出することで依頼完了とする。

依頼をこなすことにより、報酬と共にポイントが登録者の元に入り、そのポイント既定のラインに達した上で昇格試験を受けるとランクが昇格する。

また、モンスターの毛皮や爪、牙、羽などは換金の対象になる。

「説明は以上です。皆様はDランクになりますので、一番右端の掲示板がDランク用の依頼版ですのでご利用ください」

「今のランクより、上のランクの依頼って受けることは出来るんですの？」

「はい、可能ではありませんが、それはCランクからになります」

「つまり、Dランクのわたくし達がCランクBランクの依頼を受け

ることは不可能、ということですね」

「はい」

「わかりましたわ、ありがとうございます」

登録を無事に終えた三人はさっそく掲示板の前に立って、貼られている依頼書を眺める。

「んー……やはり最低ランクなだけあって、血肉沸き踊るって感じのものはありませんわね」

「ち、血肉沸き踊るって……お前なあ」

「討伐依頼とかほとんどねえしな。大体が薬草採取か、荷物運びってところか。シキ、どうする？」

「んー……ふと思ったんだけど、俺ら三人で一つの依頼受けるの？」

「……ランクを上げるには別々の方がいいかもしれませんわね」

「ちょっと聞いてくる」

「え、ゼロ？」

ゼロが再びカウンターに向かい、説明をしてくれた女性に何かを問いかけていた。二言三言会話を交わすと、シキとリュイに向けて手招きをした。

「ゼロ？」

「パーティ申請出来るんだと。そうすると個人依頼で受けた分の一部のポイントが他のメンバーにも入る。パーティで依頼を受ける場合もあるらしいぜ」

「ソロでやるよりは早いつてことか」

三人はそれぞれ顔を見合わせ、不敵な笑みを浮かべて申請する。

パーティ名は『アヴァロン』

ケルト神話において霧に包まれた伝説の島であり、アーサー王をはじめとした英雄達の集いし島と言われている。このパーティ名は三人が初めてパーティを組んだ 版時代につけた名前だ。

その名前が使用できなければ他の名前を考えなければならない。だが、思った以上に登録はすぐに終わった。登録が終わればもう一度掲示板の前に立ち、それぞれ依頼書を剥がしカウンターに差し出すのだった。

03 (後書き)

お気に入り登録ありがとうございます！

これからもがんばりますので、更新スピードは生ぬるい目で見えていただければ幸いです。

ギルド前で二人と別れ、シキは依頼人の元に向かう。

依頼は食堂兼酒場の手伝いで、わかりやすく言えばウェイター。女性限定と書かれていなかったので、シキはこれを選んだのだ。酒場は情報収集には欠かせない場所なのだから。

「すみませんー」

建物の扉を開けると、ちょうど客足の切れどきなのか中は閑散としていた。

「いらつしゃいませー」

「あ、客じゃなくてギルドの依頼を見て来たんですけど」

「えっ？ きゃー！ 大将 っ」

ウェイトレスの女性が小さな歓声をあげながら奥へ駆けて行く。数秒後、酒場の主と思しき男性が出てきて、シキを上から下まで品定めするように視線を巡らせていた。

「兄さん、うちは中々の荒くれどもも来るけど大丈夫かい？ 人間だけじゃなくてドワーフなんかもいるぞ？」

「あ、はい。これでもオレ、竜族なんで。500年ほど引き籠ってましたけど」

「竜族がウエイター……なかなかシユールですね、大将」

「500年も引き籠ってたってんなら、驚いただろ」

「無視ですか!？」

「ええ、まあ。王国が帝国になってたり、いつのまにか帝都なんて大きな街が出来てたり出びっくりです」

「お兄さんも無視!？」

「ミリーナ喧しいぞ」

「うわーんっ！ 大将のばかりっ!!」

酒場のカウンターの隅まで走って座り込む女性。壁に向かってぶつぶつ言っている姿は客商売とは思えないほど怖かった。

「あの、いいんですかアレ」

「いつものことだ、構いやしねえ。そっぴやあんたの名前は？ 俺あ、ジェイルだ。アレはミリーナ」

「シキです。一応まだまだ新米の冒険者ってところです」

ジェイルと名乗った酒場の主はシキに簡単な説明をする。

本来なら彼の妻がミリーナと共にホールを切り盛りしているのだが、前日から風邪をひいてしまった。前日の夜はなんとかぎりぎり凌いだのだが、さすがに二日目ともなると少々きつい。それを感じたジェイルは朝市でギルドに依頼を出したのだ。僅かな運をかけて

「酒場の給仕なんてあんまりやりたがる仕事でもねえからよ。今日も二人で死ぬ気でやるかなんて話してたところだったんだが……」

「新米なんで、どんな仕事でもこなしていきますよ。千里の道も一歩から、です」

シキの言葉にジェイルがばんばんと彼の背中を叩きながら笑う。

「いいこと言うじゃねえか、シキい。そうそう、最近の若い奴あなんでもかんでも突っ走る傾向があつからよ。おめえみてえに少しは地道な努力って奴を覚えりゃいいものを」

「あ、でもオレもCランクまで言ったら突っ走ろうと思ってます」

その言葉に一瞬目を瞬いて、ジェイルはまた大笑いした。

夜も更けると酒場の本領発揮とばかりに賑わってくる。シキもミリーナにいろいろと教わりながら料理や酒をテーブルへ運んで行った。

細身で、男ではあるが、どちらかというとならしいとは言いがたいシキは、よく酔っ払いに絡まれ、セクハラもどきを受けていた。

「男のケツ揉んで何が楽しいんだか」

「うーん……なんかシキさんて、妙な色気があるんだよね。なんて言うか、ちよつと手え出したいけどそれ以上は踏み込みたくない、みたいなの？」

「ワケわからん」

「ぶーぶー。感覚的なもんだから説明がつかないのー」

「そうか。だったら仕事の続きするぞ」

お盆を口元に当てて文句を言うミリーナの頭を軽く小突いて、シキは受けた注文を伝えるべく厨房へ。

「大将っ、ロツテン牛のステーキのポトト添え一つお願いします！」

「おうっ！ シキっ、フィッシュアマツシュあがったから持って行ってくれっ！」

「はいっ」

基本的に夜は酒場がメインなだけあって、酒類の注文はよく出るものの、きちんとした料理も出る。ジェイルがシキの述べたように、彼の経営する食堂兼酒場『ディオニス』は冒険者たちが立ち寄る酒場で、大柄の肉体派の人物が多かった。そんな中ではシキの細い体は確かに見劣りし、場合によってはひよろっこいもやしな兄ちゃんと言った視線を向けられる。

「フィツシャマツシユお待ちどうさまです!」

「待ってました!」

随分酔っぱらった赤ら顔の男が皿を受け取ると同時に、シキのお尻にそつと手を伸ばそうとする。しかしばこーんと気の抜けたような音と同時に男は頭を押さえながら机に突っ伏した。

「だめですよー、ガンツさん。シキさん、こつ見えても竜族ですからガンツさんなんて

ぼぼーんではーんですよ」

「ミリーナ、ぼぼーんではーんじゃわかんねえと思う」

「んんっ? ならばばーんではん?」

「……もういいや」

ミリーナ独特の表現に付き合いきれなくなったシキは、もう片方の手に持っていたジョッキをテーブルに置いて行く。

「しっかし、ミリーナちゃんが言ってることが本当なら、なんで竜族のあんたがこんなところでバイトなんてしてんだ？」

「500年ほど引き籠ってたんで、いろいろと状況把握しようときルド登録した末の依頼です」

「じっやっ……!？」

酒場ないが静寂に包まれると同時に、周囲の視線がシキに突き刺さる。

「今は世間知らずなただの新米冒険者です」

それだけ言っただけでシキはテーブルから遠ざかっていく。

その後も、シキに対して何か言いたげな視線を向けてくる客がいたものの、酒にのまればそれも忘れるのか、店が閉まる頃には酔っ払いの集団が出来上がるだけだった。

閉店の時間はすでに深夜近く。大将であるジェイルは建物の二階が自宅であり、ミリーナは裏手にある家が自宅だった。

仕事が終わってシキはあることに気付いた。

「あ、今日泊るとこないや」

朝までいた宿は一泊のみの支払いしかしておらず、そのまま出てきたこともあって継続予約はしていない。

「まあ、【ホーム】に行けばいいか」

中指にしてある【ホーム】への移動手段である指輪を起動させようとしたとき、突如後ろから抱きしめられる。思わず裏拳を叩きこみそうになったが、耳に届いた声が聞きなれたものだったので体の力を抜く。

「ゼロ、なんでここに？」

「迎えに来たに決まってるんだろ。何かあるとは思ってねえけど、心配は心配だからな」

「そっか、サンキユ。それと、ゼロ達は宿とか取ったのか？」

「ああ。もちろん、お前の分も取ってる」

「相変わらず気が利くよな、お前。オレ、いつもゼロにお世話になりっぱなしだ」

「それでいいんだよ。どうせ、俺がここまでするのお前だけだし」

後半は小声だったせいも、シキの耳には届かなかった。

酒場の女将の風邪が治るまでの三日間、シキは酒場の給仕を見事に務めあげ、大将のジェイルとウエイトレスのミリーナとすっかり仲良くなり、王都に寄るたびに三人で食事をディオニスで取ることですっかり常連と化したのだった。

Dランクの依頼をこなすこと半月。ポイントも大幅にたまり、あと少しでCランクにあがれるかと言う所で、シキはリュイがやけにご機嫌なことに気付いた。

宿の一室で話を聞くべく、彼女の好きな紅茶とお菓子を用意する。ゼロは現在依頼を受けていて傍にいない。

「リュイ、どうかした？」

「ふふつ。実はとっても素敵な子をギルドで見つけましたの！」

「素敵な子？」

「はいっ。エルフ族の冒険者だったのですが、周囲を固めるのが狼族と鳥族のたぶん剣士か戦士系ですわね。それと人間の魔道士っ。それぞれにアプローチをかけられているのにまったく気付いていなかったんです！ 彼こそまさに天然総受けっ子です！」

「……リュイがそこまで気にするってことは、そのエルフの冒険者って」

「男の子ですわよ、勿論」

目をきらきらさせているリュイにシキは小さくため息をついた。

お嬢様風の口調に見合うだけの可憐かつ美麗な容姿をしているリュイの趣味は人間観察。特に、男同士がいちゃこらしているのを見るのがとても好きなのだ。

現実でもよくその手のイベントに行ったり、二次元のキャラクタ―を使って漫画を描いているとシキは聞いていた。

「好きだな、リュイそういうの。前にも男同士のカップル見てきや―きや―言ってたし」

アルカディア・オンラインは世界各国にプレイヤーがいたためか、わりと恋愛は自由な部分が多く、中には実際にゲーム内で結婚したり恋愛関係になる同性同士のカップルも少なくはなかった。

「シキも嵌ってくれたらよろしかったのに。ああ、でも今のシキは男性だから、わたくしの妄想対象に入りますわよ?」

「中身は女ですが」

「外はBL、中身はNLである意味健全ですわね」

「ああ、なるほど……って納得するなオレ」

「シキは恋愛するならどちらですか?」

「何、いきなり」

細くて白い指を口元に当てて考える様子を見せるリュイを、シキ

は素直に可愛いと思う。自分の本来の性別が女性であることを唯一知っているプレイヤーでもあったので、ゼロとは違った意味で大切にしていた。

「さつきも言いましたが、シキの肉体は男性ですから恋愛をするなら女性でしょうか？ でもシキの中身は女性。精神で考えるなら恋愛対象は男性」

「そういうことか。恋愛、なあ……今のところそういうのにも興味ないし、考えられないっていうのが正しい。それ以前に、自分の体を見るのも微妙な気分」

シキの今の状態はかなりアンバランスだ。

男の体に女の心。

肉体変化を受け入れたとはいえ、最初は戸惑った。特にお風呂とトイレで。

ゲーム内では排泄など必要のない行為だったが、今シキがいるのはゲームの世界じゃない。異世界と言う名の現実だ。

「……シキは恋愛しないつもりですか？」

「いや、恋愛はしたい」

恋愛はしたい。

それは間違いない。

「でしたらその時のために考えておかないと。対象を男か、女か」

「そうは言っても……」

「簡単ですわよ。抱きたいか抱かれたいかで考えればいいんです」

「……考えておく」

眉を顰めるシキに、リュイはくすりと笑ってから手元にお菓子を齧った。

ポイント既定のラインに達し、昇格試験を受けようと三人はギルドに足を運んだ。しかしカウンター前は人でごった返しており、自分たちの番が回ってくるまで時間がかかりそうだった。

「どっつするっ」

「番号札取ってその辺でだべってりゃ時間くるだろ」

「それもそう……ああっ、あれはフィン君ですわっ！」

「「ふいんくん？」」

ゼロとシキの声がはもる。

「シキにはこの前お話したでしょう？ 天然総受けっ子のフィン君ですわ」

「ああ、あの」

「リュイ、てめえまだあの趣味治ってなかったのか……」

「一生治らないと思います」

きっぱり宣言する彼女に、シキとゼロはちらりとお互い視線を交わし合い、頷いてそのまま放置しておくことを決めた。

「やっぱり可愛いですわ、フィン君……ああ、しかも新しい人も加わって……」

リュイの視線の先には一人の少年を囲むようにして立っている四人の男がいた。

「そんなに気になるんなら話しかけてくりゃいいじゃねえか。同族に会えてうれしいとか言っつてよ」

「ナイスですわ、ゼロ」

さっそくとばかりに向かうリュイの後ろ姿を眺めて、シキはゼロを伴って近くのテーブルに座る。

二人の間にその時ばかりは会話もなかった。

しかしそれでも空気は和やかなままで。

テーブルに突っ伏したシキの髪をゼロが撫でて、シキはその手を自分の手にとって、互いの手の大きさを比べて違いにへこんでいた。

「なんでお前こんなにでかいの？ 身長も10センチくらい違うよな」

「名前と種族以外はランダムだったんだから、しょうがねえだろ」

「そりゃそうだけどさ」

そこで話は一端終わった。満面の笑みでリュイが二人を呼んだからである。手招きしている彼女に従い、二人は立ち上がりそちらへ足を向ける。

「フィン君、わたくしの仲間のシキとゼロですわ」

「初めまして、フィンです。種族はエルフです」

「シキだ。種族は竜族、よろしくな」

「ゼロ。種族は魔族」

ゼロが種族名を言うと、フィンの周囲にいた者たちが剣呑な目つきで彼を見る。

「……そんな目で見られる謂れはねえんだけど？」

「ちよっ、みんな何してんのさっ。ゼロさんは悪い人じゃないでしょっ」

「けどこいつ魔族じゃん。フィン、昔魔族の奴に何されたか忘れたわけじゃないだろ？」

「確かにそうだけどっ。でも、ゼロさんはあの魔族じゃないし、そんなこと言ったらクロスの憧れてる『夜の調べ』のアレクセイさんだっつて魔族じゃないか」

「ア、アレクセイさんは別だっ」

フィンの隣にいたクロスと呼ばれた狼族の青年が慌てたように弁解し始める。

「クロス、フィンの言うとおりだ。冒険者の中にも魔族の者はたくさんいる。魔族だからとひとくくりにするのはいいいことではない」

「ラス……」

「私はラス。種族は人間だ。ゼロ殿、先ほどは失礼した」

「いや……」

深々と頭を下げるラスと名乗る男。彼に続くようにテーブルを囲んでいた残り二人の男たちがそれぞれ自己紹介をする。

「セイン。種族は鳥族、よろしくね」

「ゾックス。人間で格闘家をしている」

へらへらとした笑みを浮かべるチャラ男系の青年と、筋肉質のマツチヨな男。

全体を見ればかなりアンバランスなのだが、シキは自分達三人も見た目だけならアンバランスなので人の事は言えないと思う。

「……クロス。狼族の魔法剣士」

最初につつかかって来た狼族の青年が投げやりに名乗って来るが、

「クロスっ、ちゃんと挨拶しないと口きいてあげないからねっ」

「ぐっ、それは嫌だ」

「じゃあ、ちゃんと挨拶する。まったく、こんな子に育てた覚えはないのに……」

フィンに窘められ、きちんと挨拶といった形に直して自己紹介をした。

05 (後書き)

これでメイン、サブメイン共に勢ぞろいです。

フィンがいわゆる王道系ポジションの総受け子です。

そして、感想ご指摘いろいろとありがとうございます。

それらを踏まえたうえでがんばって更新していきたいと思えます。

登場人物紹介（前書き）

一部ネタバレもあつたりする。

登場人物紹介

【メイン】

シキ

種族は竜族の最強種・始源竜。藍色の髪と金の瞳を持つ。レベルは1500。

ゲーム内で十人ほどしかいないマスタークラスのプレイヤー。元々現実世界では女性で、男への肉体変化には最初は戸惑っていたが、どうにもならないのでわりと順応しつつある。

傍観者気質。リュイの影響でBLには理解があるが、ゼロの自分への感情に関してはまったく気付いていない。

現在の職業はサムライ。

ゼロ

種族は魔族の最強種・魔王。濡羽色の髪に金の瞳を持つ。レベルは1500。

ゲーム内で十人ほどしかいないマスタークラスのプレイヤーの一人。シキと最初にコンビを組んで以来、シキに恋愛感情を抱いている。けどまったく気付かれてないので、じわじわと外堀埋めてます。シキだけに優しい俺様肉食系。リュイに対しては悪友的な感じ。

結構なバトルジャンキーで、さらにいえばゲイ寄りのバイだったりする。

三人組の中では実は現実年齢が一番下。

現在の職業はガンナー。本業はガンブレード使用の魔法剣士。

リュイ

種族はエルフ族の最強種・妖精女王。プラチナ色の髪に金の瞳を持つ。レベルは1500。

ゲーム内で十人ほどしかないマスタークラスのプレイヤーの一人。中身は腐った女子で、最近はやフィンを巡る男たちの争いも興味の的。シキとは親友で唯一シキの中身が女性だと知っている。

シキとゼロの仲がいい加減進展すればいいのにとか思ってる。

三人組の中では実は現実年齢は最年長。わりといい年齢だったりする。

現在の職業は魔道士。

【サブメイン】

フィン

種族はエルフ族、金髪碧眼の美少年。

天然総受け体質。ギルドやパーティを組んだ者達（男）から必ず告白されている。リュイは男にしか効かないフェロモンでも出ているのではないかと思っている。

見た目は少年だが、200年は生きており、クロスの養い親だったりする。

職業は弓使い。王道系ポジションの子。

クロス

種族は狼族、赤銅色の髪に茶色の瞳をしている。

スピードを生かした魔法剣士で、群れからはぐれた自分を拾って育

ててくれた養い親のフィンに対して恋慕の情を抱いている。しかしまったく通じていない不憫な子。その上恋敵は増えて行く一方。

ラス

種族は人間、黒髪に黒い瞳をしている。

魔道士でそこそこの実力者。依頼でフィンと臨時パーティを組んだ時に一目惚れし、以降共に旅をしている。

セイン

種族は鳥族、金髪に灰色の瞳をしている。

双剣士でそこそこの実力者。こちらもラス同様、依頼で臨時パーティを組んだ時に一目惚れし、以降旅を続けている。

ゾックス

種族は人間。茶髪に茶色い瞳をしている。

格闘家で、そこそこの実力者。王都でフィンと出会い一目惚れ。旅の同行者になることを交渉中。

シキは総受けにはなりません。逆ハーとかないです。百合もないです。体はBL精神はNLな感じで進行します。

わりと設定は主人公より濃かったりする、ゼロとリュイです。

パーティを組んでいるとはいえ、昇格試験はそれぞれ個人対象によるもの。三人はそれぞれ試験内容が異なっている。

また、パーティにもランクが存在している。ただし、パーティのメンバーが全員Bランク以上でないとパーティにはランク証はつかない。

「ゼロとリュイの試験内容、どんなのなんだ？」

「俺は近くで出るっていうウルフの討伐。つっても討伐隊がいるから、それに協力ってとこだ」

「わたくしは薬草採取ですわ。満月にしか咲かない“月の雫”を同行者と共に採取せよ、です。シキはどういうものでした？」

「それがさ……」

ぴらり、とシキは二人に内容が見えるように紙を翻す。

そこには“パーティランクC・ステラの依頼の補助せよ”と書かれている。その下には集合場所と集合時間。

「依頼の補助の依頼の部分が不明なのは怖えな。まあ、お前がやられることはねえと思うけど、下手に俺らの力がバレると不味いこと

になりそうだ」

「少なくとも、特限スキルは使用禁止ですわよ」

「了解」

特限スキル。正式名称は特殊限定スキル。

最強種へと転生を果たしたプレイヤーだけが使用できる特殊スキルで、使用すれば一発で最強種だと発覚する。そして、その能力はどれも強力かつ凶悪なのだが使い勝手が良かったため本人達は抵抗なく使用していた。

「とりあえずオレ行くわ。そろそろ集合時間っぽいから」

「気をつけてけよー」

「また宿でお会いしましょう」

二人に見送られ、シキはギルドの待合室を出て行った。

人通りの多い王都の道をつまく人をよけながら歩き、集合場所の中央広場噴水前に着く。噴水横の時計はちょうど集合時間三分前を示していた。

時間の概念はシキ達が知っているものほとんど変わらないが、時計の表し方だけが何時何分ではなく、何の刻何の時という言い方になる。

たとえば、9時半の場合は、9の刻30の時といった言い方にな

る。

「ステラのメンバーってどういう奴がいるのかな？ 面倒くさそうなタイプじゃなきゃいいんだけど……」

シキはゼロとリュイ以外とパーティを組んだことがない。

ストーリークエストもシキはパーティクエストに当たったことがないため、ソロもしくはゼロとのコンビで終了していた。元々集団行動することが苦手なのもあり、ゼロとリュイも同じだったために3人でのパーティになっていたのだ。

多少のわくわく感もあれば、集団行動しなければならぬというげんなり感もあるという矛盾を今のシキは抱えている。

「あれ？ シキさん？」

「……フィン？」

声がするほうに視線を見れば、金髪碧眼の美少年とその取り巻きともいえる一行がいた。

「こんなところでどうしたんですか？」

「ギルドの昇格試験だよ。ここであるパーティと待ち合わせしてるんだが……」

「……もしかしてそのパーティってステラですか？」

「え？ そうだけど、なんで……もしかして」

「……パーティ・ステラ代表のフィンです。昇格試験の試験官に任命されました」

一瞬にしてフィンの顔が温和な美少年から冒険者としての顔に切り替わる。シキもそれに対応するかのように背筋を伸ばす。

「昇格試験、受験者のシキです。本日はよろしくお願いします」

「はい、こちらこそ。さつそくですが、うちのメンバーを紹介します。とはいってもみんなシキさんの知ってる人なんですけどね」

苦笑しながらフィンが指さす先にはシキも知っている男たちが並んでいた。

「東門の前で依頼人と待ち合わせしてるんで、道すがら説明しますね」

「あ、うん」

シキは置いて行かれぬようフィンと並んで歩く。後ろから突き刺さる野郎どもの視線は気にしないようにして。

「依頼はここから東に二日ほどかかる距離の村まで護衛なんです。その途中の道で最近盗賊が多く出るみたいで、ギルドにも護衛依頼が多発してるんです」

「多発してる護衛依頼を昇格試験にするギルドって……」

「習うより慣れろ、ですよシキさん」

「ちょっと意味違うよな、それ」

「そうですか？」

（つてか、本当にこいつ愛されてんだなあ。さつきからすげえ殺気）

殺気で首の後ろがちりちりする。

「オレの役目は？」

「基本的には何もないと思ってきていいです。ただ、たまに攻撃し損ねたりとかする場合もあるんで、その時フォローしてくれば」

「了解、試験官様」

さらに歩くこと数分。王都の東にある東門の前に数台の馬車と商人と思われる者達が待ち構えていたように並んでいる。

「これはこれはフィンさん、今日もよろしくお願いします」

「カイエンさん。こちらこそ、いつもありがとうございます」

見た目二十代後半のノーフレームのメガネをかけた、いかにもインテリといった感じの男が前に出てフィンに握手を求め。お互い笑顔で握手を交わす二人に、シキの後ろにいた面々の殺気が膨れ上がる。

「あのさ、そんな風に殺気向けて大丈夫なのか？ 依頼人だろ？」

「いいんだよつ。あいつ、いつつも俺らに依頼頼むお得意様とか言う奴だけど、隙あらば俺のフィンに手え出そうとしてる奴なんだから！」

クロス言葉を皮切りに、今度はフィンが誰のもかと言う口論が始まる。

(う、うぜえ……フィンの奴、本当にこれだけ言ってるのに気付いていないのか？ それともあえて知らないふりしてるとか……もしそうだとしたらアカデミー賞モノだ)

後ろでは討論会のような口論。前では商人とフィンの和やかな会話。間に挟まれたシキは面倒くさそうに大きなため息をついた。

06 (後書き)

今回は短めです。スローペースですいません。

感想ご指摘いろいろとありがとうございます。

一人一人しっかりきっちり読ませていただいております。
後日きちんと返信させていただきます！

簡単な舗装しかされていない道を一定の速度で歩く馬車。

隣には試験の監督役のフィンが座っている。これはまだいい。

しかし、対面式の馬車で彼らの反対側には依頼人である宝石商を営むカイエン。隣に秘書らしき男。この二人はシキをいないものとして、フィンにばかり話しかけている。シキが疑問に思ったことをフィンに問いかければ、フィンとの会話を邪魔されたとばかりにシキを睨みつけてくる二人。

いい加減にしろと言いたい。

二人の中ではただの新米で非力な冒険者としか思われていないということシキはわかっている。目がそう言っているからだ。

(これが二日も続くとなると……切りたくなるな)

少々危ないことを考えつつ、自身が持つスキルの一つ【索敵】を発動する。

(範囲は周囲5キロ、っと……うん、すでに引っかかっている所がテンプレだよな)

「フィン」

「なんですか？」

「ここから3キロほど行った所に20人ほどの人の固まりがある。動く様子が見えないんだが、盗賊だったら嫌だから斥候を出しているか？」

「あ、それでしたら僕がします。風の精霊と契約してるんで」

言うなりフィンは風の精霊を呼び出し、馬車の外に放つ。魔力の高い者であれば精霊の姿は視認可能で、シキも彼の呼び出した小さな精霊の姿を見て取れた。

「シキさん、よくわかりましたね。竜族の力の一つですか？」

「りゅ、竜族!？」

「あ、はい。シキさんは竜族なんですよ。なんでも500年ほど引き籠ってみたいで、世界が様変わりしてびっくりしたって」

「引きこもりで悪かったな。あと、さっきのは竜族の能力じゃない。【索敵】っていうスキルの一つなんだが……持ってないのか？」

「? スキルって何ですか？」

「……魔法の一つ？」

シキ達プレイヤーは普通にスキルを使用していた。だからこそ、今一つスキルがどういうものなのか口頭で説明しづらい。魔法で括ったほうが相手がわかりやすいので、魔法と説明したのだが、思わ

ず疑問形になってしまふ。

「便利な魔法なんですね。じゃあ、えっとせつこう？　っていうのは？」

「斥候な。フィンの風の精霊と同じだよ。召還した動物、こういうときは鳥かな。それを放つて相手の様子を確かめるんだ。精霊は目には見えないから便利だけど、相手にフィンみたいなエルフがいた場合は感知されやすいだろ」

「はい」

「でも動物だと逆に警戒されにくい。こういう森だと鳥なんていくらでも飛んでるし。まあ、逆に動物を見かけない地域なんかだと疑われるから、その辺は個人の状況判断だな」

そこまで説明し終わると、フィンの目がキラキラと輝いているのがシキの目に見て取れた。そして彼はシキの手をぎゅっと握りその時商人と秘書がムンクの叫びのような顔をしていたのは無視して　笑顔で叫んだ。

「すごいですっ！　初めてシキさん達見た時から絶対に只者じゃないと思つてたんです！」

「そ、そうだったのか」

「はいっ。だってシキさん気配消すの上手いですし、ゼロさんは隠してますけどすごい魔力を感じてます。リュイさんに至っては契約してる精霊達がすごく喜んでるんです。僕、200年生きててこんな初めてです」

わりと自分に対してだけそんなに称賛していると感じないのは気のせいだろつか、と思いつつ、シキは乾いた笑いをもらす。

（ダメだ。この子、本当に素でこれなんだ。天然っていうより鈍いんだ。え、なにゆとり教育？）

その時風の精霊が帰還し、フィンの耳に何かを囁いた。それに頷いたフィンがカイエンに伝えると同時に、精霊を送還しようとするが精霊は嫌がっている。

「どうしたの？」

“ご挨拶したいの”

「挨拶？」

精霊はちらちらとシキに視線を送っており、シキもそれをしつかり受け取っている。そこに込められた意味も。

「いいよ、おいで」

ぱあっ、と精霊の顔が輝き、シキのほうに飛んでくる。精霊は小さな唇をシキの頬に付けて、にっこりと微笑んだ。

「話はまたあとでね」

シキは頬を緩めて、人差指で精霊の頭を撫でた。それが合図のように精霊の姿はかき消える。

「えーっ！？ なんですか、今の！」

「ああ、オレ風竜出身だから風の精霊には懐かれやすいんだ」

嘘ではない。

シキが最初にプレイヤー登録したさいには、竜族の中でもスピード特化の風の魔法を操る風竜族として登録した。転生したことで風竜ではなくなっただが、それでも一番相性がいい属性は風だ。

「エルフが精霊や動物と親しくなるのと一緒にだよ。それよりフィン、報告があるんじゃないか？」

「あつ、そうだ！ カイエンさん、ここから2キロほど行った所に盗賊団が待ち構えています。僕達が先に行って倒しておくので、別の馬車に移って速度を落として走行してください。シキさん、協力お願いします」

「了解」

カイエンが馬車を止め別のに乗り移り、フィンとシキの乗っていた馬車に、ステラのメンバーが乗り込み先行する。御者を務めるのは人間であるラスとゾックスが適任なのだが、見た目で盗賊団が警戒する可能性があった。ラスはいかにも魔道士らしいローブを着ており、ゾックスは筋骨隆々で農夫ならともかく隊商の御者には見えない。

「ラス、ローブ脱いでもらっていい？」

「うむ。フィンの頼みなら仕方ない」

「ありがとう。ごめんね、ローブは魔道士の証なのに無理言って」

「大丈夫だ。これも依頼なのだから」

ローブをたたみ、杖と共に御者台の隅に置いておく。

その状態でしばらく進むと、予め得ていた情報通り20人ほどの盗賊達がナイフや剣片手にぞろぞろと出てくる。その口から出る口上も似たり寄ったりで、中で聞いていたシキはつまらなそうに小さく息を吐いた。

だが、その間にもフィンやクロス達は馬車の扉を開けて外に飛び出し、盗賊達に攻撃を仕掛けていく。シキが外に出た時には半数以上の盗賊達が血を流して倒れていたり、魔法で黒焦げや氷漬けになったりしている。

「オレの出番なさげ？ ってか、ちょっと気持ち悪い……」

辺りを漂う血臭に肉の焦げた臭い。

(っ……！ ここは、ゲームじゃない……血だつて出るし、一歩間違えば死ぬんだ……)

ゲームでは死亡によるゲームオーバーでも少し時間が経てば復活できる。攻撃されてもエフェクト効果が出るだけでも、痛みも何も感じない。

しかし、今シキがいるのはゲームの中の世界じゃない。

今のシキにとって、ここが現実。

「やばっ……吐きそ……」

口元を抑え、迫り上げてくるものを我慢していると、視界の端に己に向かってくる影を捉える。

「シキさんっ！」

フィンの声にシキの体が反応する。

シキの手が腰元の刀に触れたかと思うと、目の前に迫っていた盗賊の首が胴から離れていた。切口は凍っており、血が噴き出すことはない。

『氷華凍月』

シキの愛刀であり、氷属性の力を秘めている刀。スキル【永久凍土】を標準装備しており、これに切られた相手は状態異常【凍結】となり体力値が徐々に削られていく。しかし氷漬けになる時間は所有者の属性魔力値に左右され、属性魔力値が高い者ほど凍結効果も長い。

マスタークラスであるシキの属性魔力値は、風は最大値でそれ以外もほぼ最大値に近いステータスを保有している。

本来であれば全身が氷漬けになってもおかしくないが、シキが持つサムライとしての技量と合わさって切り口だけを凍らすという神業が為し得た。

「ははっ……」

(初めて、初めてこの手で人を殺した……)

仮想現実ではただのゲームオーバーでしかないが、現実である今はれっきとした殺人行為に値する。

肉と骨の断つ瞬間の感触が手に残っている。

「あははは……」

小さな笑いだけが唇から零れ出る。

それがスイッチだったかのように、シキは自身が持つポテンシャルを使用して周囲を囲んでいる盗賊達を切り捨てて行った。

07 (後書き)

異世界トリップ設定で、あんまりみんな書かないけど、絶対自分の攻撃で相手の命が失われたら何かしら思う所があると思うんですね。

カチリ、と刀が音を立てて鞘に納められる。

その周囲には首と銅、上半身と下半身と真つ二つに切り裂かれたり、心臓一突きされて倒れている盗賊達がいる。その切り口はどれも凍っていた。

「な、なんなんだよあいつ……」

クロスの職業は魔法剣士。剣で生業を立てているからこそわかる。

目の前の人物の技量は生半可なレベルのものではないことが。

乱戦のさなかだと普通にただ斬るほうが至極簡単。反撃されることもあるが、大きく斬ってしまえばそんなこともない。大ぶりだと避けられることもあるのでそのあたりは剣士の技量による。

だが、シキの場合は違う。

無駄な体力を使わないため最小限の動きで相手の命を奪い、次の相手へと向かう。まさに一騎当千のための技。

「ぜってー只者じゃねえよ……」

ぼつりと零した所で、シキの体がぐらつき前のめりになる。

「シキさんっ！」

地面に手をついて荒く呼吸をするシキにフィンが慌てて状態を確かめようと手を伸ばす。だがその前にシキが顔をあげてフィンに小さく微笑んだ。

「大丈夫、血の臭いに気持ち悪くなっただけだ」

「そう、ですか。慣れてる僕も少しきついですし、久々のシキさんだとかなりきついかもしれませんね……ちよっと待ってください。【癒しの光よ・我は願う・身に纏いし不浄なるものを取り除かれんことを・清浄^{クリア}】」

青い光がシキの周囲を包み込むこと数秒。光が収まればシキの青かった顔色が少しだけ元に戻っていく。

「さっすがフィン。短縮詠唱でこの効果。すごいよね」

「回復魔法はエルフ族が得意とするものだからな」

「当たり前だろ。フィンは一族の中でも一番ハイエルフに近いって言われてるんだからなっ」

「お前が威張ることでもないだろう」

クロスはちらり、と三人に視線を向けてから二人の元に向かおうとした時、後ろから馬車が駆けてくる音がすることに気付きそちらに視線を向けた。

後に、彼はこの時さっさと聞きたいことを聞いておけばよかったと後悔することになる。

目的地であったスコーネ村に到着するまで、いつくかの盗賊団が出没するもすべてシキ達の手で倒され、二日目の後半はほとんど盗賊が出ることもなく楽な道のりだった。

その間、シキは馬車の中で誰とも話すことなくぼおつと空を眺めていた。それは村に着いてからも同じで、村の外れにある巨木にもたれかかりカイエン達の仕事が終わるまで目を閉じていた。

耳元を風の精霊たちの囁きが擦る。

巨木に宿る樹の精霊もシキを慰めるように葉をざわめかせている。

竜族は元々エルフ同様、精霊と親交が深い。ましてや、シキはエルフ族最高位の妖精の女王たるリュイの親友であり、シキ自身も竜

族の最高位の始源竜。それだけで精霊達は敬意を表する。

“ 始源竜様、大丈夫ですか？ ”

“ 女王様に報告？ ”

「 いや、そこまでしなくていいよ。ここで寝てるだけで十分だから
その答えに精霊達はそつと静かに姿を消して行く。

「 おや？ 精霊達が自ら姿を見せるとは珍しい……」

目を開けて視線を流すと、ローブを纏った魔道士風の老人が近くに立っている。ゆっくり立ち上がり挨拶しようとするが、逆に老人に止められる。

「 無理しなされるな。顔色が悪い」

「 すいません……」

「 ……魔法で治るようなものではないかね？」

「 そう、ですね。少し精神的なものなので。自分の中で割り切ってしまうは楽なのに、今はそう出来そうになくて」

見ず知らずの人に何を喋っているのか。

シキは自問自答するけれど、口が勝手に動いて行く。

「 結局ぐだぐだ考えてしまっんですよね」

「それが人、いや生物というものだよ。我々は思考する生物だ。思考することで選択する。違うかね？」

「それはそうですが……」

「存分に考えるといい。そして出た結果を受け入れるのじゃ。それがお主の選択なのだから」

老人の言葉は脳内で咀嚼する。

ここに来るまでシキはずっと考えていた。正確には恐れていた。

仕事という名目で人を斬り捨てることに慣れることを。その感触が当然のモノになってしまうことを。

いつか元の世界に戻った時、傷つけることに厭わなくなってしまうことを。

(何しても、どう考えても今いるのはこの世界。受け入れるしかないんだ)

頭の隅のどこかに未だ燻っていた。

この世界は夢で、目が覚めればそれまで送っていた日常が帰ってくるのだと。

けれどそれがまさに夢。

今シキが立っている世界こそが日常を送る場所。

（郷に入りては郷に従え。やらなければやられる世界。今、ここが“私”の現実）

そう、受け入れた瞬間、目の前が鮮やかに変化した気がした。

「ありがとうございます。なんとなくですが、自分の中に答えが出ました」

「そうか、そうか。それはよかった」

シキは老人と二言三言話し、フィン達がいる宿屋へと足を向ける。だから知らなかった。

シキの背中を見送った老人が目元を和らげ、

「あれが始まりの竜。真なる竜族の王……」

と呟いたことを。

王都に戻って来たシキは、監督役のフィンの合格印をもらって早々ギルドへ提出。無事に昇格を果たした。さっそくとばかりにゼロとリュイが待つ定宿へと足を向ける。

階段から近いリュイの部屋をノックするも、応答はない。少し残念に思いつつ、ゼロの部屋をノックすれば中から声がする。

「ゼロ、シキだけど入っていいか？」

「シキか。いいぜ」

中に入ると、そこではテーブルの上にくっつかの試験管が並んでおり、その横には少し大きめのピーカーが置かれている。

「……ポーション？」

「ああ。ピーカーの奴がショップで売ってたポーション。試験管のがボックスに仕舞っておいたポーションだ。シキ、お前知ってたか？俺達が持つてるアイテム、ほとんど伝説級の代物だって」

「はあ！？」

「俺のディアボロスとルキフェルもそう。たぶん、お前の氷華凍月もな」

ディアボロスとルキフェルはゼロの愛用の銃とガンブレードだ。

どちらも属性が魔であり、ゼロとはこの上なく相性がいい。シキの氷華凍月のように魔法スキルはついていないが、特殊スキル【増幅】

がどちらにもセットされている。これらを装備しているとオールステータスが増幅される。つまり攻撃力も防御力も大幅にアップするという仕組みだ。ただし、所有者はマスタークラスに限られる。これはシキの愛刀も同じ。

「ならリユイのユグドラシルの弓も？」

「ああ。ただ、鑑定士の資格スキルを持った奴じゃないとわからないとは思うぜ。普通の奴は珍しい武器程度にしか思わねえだろうよ。俺も討伐隊の中に鑑定士がいるとは思わなかったからな」

「誤魔化せたのか？」

「500年の引きこもり説は大いに助かった」

喉を鳴らしてゼロは笑い、その意味を汲み取ったシキも自分が立てた設定に安堵の息をつく。

「そついやずつと聞いたことなかったけど、お前最初から銃の使い方上手かったよな」

「使ったことがあったからな」

「どっで」

「アメリカで。言ったことなかったか？ 俺、アメリカ育ちなんだよ」

「聞いたことない……というより、オレ達あんまり現実でなにしているとかそつという話したことないよな」

「そついやそつだな……」

公開リリース前の 版からの付き合いとはいえ、三人はあまり自分たちの背景を口にするとはなかった。特に問題があったわけもなく、自然と口にしなただけだった。オフ会をしようという考えもなかった。

「まあ、いい機会だから話してもいいかもな。聞きたいことあったら聞くぜ？」

「じゃあ、簡単な所でゼロのリアル年齢は？」

「そこから聞くか……二十歳だよ。大学二年」

「若っ！ オレと四つも違うのかよ……」

「あ？ ってことはシキ、お前二十四か。精々同年か年下かと思つてたぜ」

シキはその言葉に少しだけ遠い目をした。ゼロ同様、シキも実は彼が同年か年上だと思つていたので。

面倒見がよく、兄貴分的な所があるゼロはどう考えても年下には思えなかった。

実年齢がわかった今、シキは己の考えを変えることにした。自身の彼への甘えを減らして行くためにも、それが一番だろうと考えながら。

片手で食材の入った紙袋を抱え、メモを見ながら買い忘れがないかチェックしていく。

「最後にワイン……この状態でワイン、は無理だ。つーか、ワイン十本で無理だろう。どう考えたって運べないよ」

一つため息をついてシキはメモをポケットに突っ込み、改めて紙袋を抱え直した。

本日のシキのお仕事。

リュイの希望のいう名の命令によるお買いもの。

「たまにリュイは女王様になるからなあ……」

元々エルフ族はあまり表に出てくることは少ないのだが、その特性から薬草系採取にはもってこいの種族。マスタークラスのリュイともなれば、森に入った時点で探さずとも精霊達のほうから自己主張する上に、薬草が穢れていても彼女の持つスキルで元の状態に戻し、なおかつ効能を上げることも可能。ゲーム内でエルフ族だけが持っていたスキルで、高レベルになればなるほど効果は上がる。

そのこともあり、リュイは低ランクの薬草系採取の依頼を出す人

から個別指名が来るほど人気になっていた。

そしてゼロも今ギルドで話題に上っていた。魔法に対する深い造詣と、錬金術や調合師としての腕前を買われ、国立の魔法学院に特別講師として招かれたのだ。魔族は基本的には魔法に関してはいかなりの知識を有している。それに加え、ゼロは興味本位からとはいえスキル【錬金】と【調合】をMAXレベルまで上げた。おかげで彼に作れぬ薬はないと言えるほど。

ゼロとリュイが組めば薬作りに関しては天下無敵なのである。

「よくよく考えると、オレ実用的なスキルがあまりないな」

シキモスキル【錬金】と【調合】を持っているが、精々ハイポーションを作るのが限度で、ゼロのように楽々と万能薬やエリクサーを作るなどと芸当は出来ない。二つのスキルを最高位にまで極めたからこそエリクサーを作ることが出来る。

魔法薬の中でもエリクサーは精製率が低く、なおかつ【錬金】【調合】の二つのスキルを一定以上のレベルまであげないと精製出来ない。

「どつせなら全部平均じゃなくてどれか一つでも極めればよかった……平均万歳、じゃねえよ……」

大きくため息をつく。

今さら自分のプレイ状況を後悔しても仕方ないのだが。

「一度【ホーム】行って戦闘以外のスキル極めてこようかな」

シキは三人の中ではわかりやすく言えば前衛で特攻隊長。そのサポートを中衛のゼロがして、後衛のリユイが二人のサポートをするといった戦闘パターンが定番だった。よって、シキのスキルはほとんどが戦闘に特化している。

武器スキルの中のスキル【万能】を極めているために、専用武器でない限りは全て使用可能。ただし命中率があまり高くないために弓や銃といった飛び道具は苦手。

補助スキルを使えば一発で城壁も崩れるほどのパワー。本性を取った竜でも一本背負い出来るほどのチート。

風竜出身でスピードに特化しているため、常人には動きを捉えることは不可能に近い。

純然たる戦闘力だけを考えれば、マスタークラスのプレイヤーの中ではトップレベルを誇るのがシキだった。

ただし、そんなシキにも苦手な分野があり、それが魔法だった。

風属性の魔法に関しては最高位まで極めているものの、それ以外の属性の魔法に関してはレベルに相対する平均値。魔力値は高いのにそれを属性に振り分けすることをあまりしなかったのだ、シキは。

「はあ……今さらながらにマスターまで行けたのってゼロとリユイがいたからな気がするな……やっぱり、一度あいつらから離れるべきか……？」

いかにも不機嫌です、といった空気を撒き散らしながらゼロは学院の廊下を歩いていった。

「うぜえ……」

その眩きを近くで聞いた男子生徒数人がびくつ、と肩を揺らす。同時に彼らの後方から砂埃が立つほど猛スピードで走ってくる集団があった。

「先生！」

「ゼロ先生！」

「ゼロ様！」

口々にゼロの名前を呼ぶ数人の生徒と教師たち。毎日決まって彼らはゼロのフリータイムを狙って追いかけてくる。

『一度でいいから見せてください、その【古代遺物】を！』

すべては彼の持つ武器を見たいがために。

国立魔法学院古代研究会。

今となっては失われてしまった古代の叡智を追及する会で、わりと学院の中では会員数の多いサークルだった。ゼロが講師として赴任し、なおかつ彼が五百年前から生きていることを知った会員達はゼロに詰めよって当時の事を知りたがった。そして、この時代に置いては【失われた技術】で製造されている彼の愛用の武器を提示することを要求したのだ。当然見ず知らずの者に見せる気もなく、ましてや彼らに見せてはそのまま奪われて解体されかねない。

「断るつつんでんだろ！ いい加減しつけえんだよ！ いい加減にしねえとボコボコにすんぞ！？」

「一人占めするなんてずるいです、先生！」

「古代の叡智は皆知るべきです！」

毎日毎日授業が終わると付き纏ってくる連中にいい加減ゼロは辟易していた。元々気が短く、喧嘩っ早い気のあるゼロはこの時完全に堪忍袋の緒が切れていた。

「……わかった。てめえらの誰か一人でも立っていられたら見せてやる」

「えっ？」

「それはどういっ……」

「今から訓練場で戦うに決まってる。てめえら全員叩きのめしてやるから楽しみにしてろ」

「わかりました!」

「望むところです!」

「先生こそやられないでくださいねっ」

「いやあ、ゼロ先生のお手並み拝見と行きましようか」

会員達は意気揚々と訓練場へと向かい、ゼロも同じように訓練場へと足を向ける。

彼らが去った後で、残された生徒の一人がぽつりと零した。

「……ゼロ先生、この間の演習で踵落とし一発でブラックベア倒したんだよな」

生徒達がざわめくが、

「ウルフ二十頭を五分もしないで全滅させたらしいよ」

完全に廊下は沈黙で包まれた。そしてその場にいた全員が、訓練場の方に視線を向けて合掌。

09 (後書き)

バランスって大事だよね。

主人公はシキだけど、たまには仲間たちにもスポットライト浴びせてみようと思います。

訓練場の中央に銃弾の着弾の音と、同時に放たれる魔法の爆音が轟く。

「闇の焰に抱かれて滅せ・
ヘル・バースト 煉獄の天蓋！」

深淵の闇より召喚された闇の焰がとぐるを巻いて上空へと飛び、降り注いでは爆発を起こして行く。

「ぎゃー！！ ゼロ先生少しは手加減してくださいー！！」

「しかもなんでそんな上級魔法を
ハイカットスベル 高短縮詠唱で出来るんスか！

！」

「俺の実力だ！」

魔法の詠唱の仕方には四種類ある。

正式にすべての呪文を詠唱する
オールスベル 全詠唱。

一部の詠唱を省いて短縮した
ショートスベル 短縮詠唱。

ほぼ詠唱を必要としない
ハイカットスベル 高短縮詠唱。

詠唱しない ノンスヘル 無詠唱。

短縮詠唱はエルフや魔族、王宮に召し抱えられる魔道士であれば本人のレベル次第だが、上級魔法まで使用可能。高短縮詠唱は中級がギリギリのライン。しかしそんな有能な魔道士でさえ、無詠唱は初級魔法がやっと。魔法に特化した魔族でさえ、下級魔法がやっとという世界で、完全な無詠唱が出来るのは魔を統べると謳われる【魔王】だけだ。つまりそれはゼロのことで。

その気になれば彼はどんなランクの魔法でさえ詠唱を必要としない。さらに転生時の特典である特殊限定スキルとして【二重詠唱】を与えられている。同属性・他属性問わず同時に魔法を発動できる魔道士なら垂涎もののスキルだ。

「まだまだ行くぜー。其は海原荒れし波・ ダイタルウェイサ 大海嘯」

今度は荒れ狂う波が出現し、生徒や教師たちを押し流して行く。叫びも波に浚われて言葉になっていなかった。

「俺らを殺す気かー!!!」

「鬼畜教師　!!!」

「どS　!!!」

「なんとも言え。ごめんなさい、もう追いかけませんと土下座するまで俺はやるぞ」

愛銃に魔力を再装填して数々の魔法弾を撃ち出して行く。ゼロの持つ銃・ディアボロスはその自体が魔法を発動するための媒体にな

っており、魔力を込めるだけで任意の魔法が発動するようになって
いる。ただしレベルと種族制限がかかっており、魔族プレイヤーで
レベル1000以上のプレイヤーしか使えないハイスペックアイテ
ム。普通の銃弾も装填可能なので、極々普通の銃としても使用可能。
特殊スキル【増幅】がかかっているので、使用する者次第でかなり
の便利アイテムになる。

水浸しになっている所へ雷の魔法を撃ちこむ。すなわち水に雷が
伝導して周囲に広がる。結果、感電。

さすがにそこまでされるとこれ以上の気力はなくなり、傷の浅い
メンバーがゼロの目の前でそろって「ごめんなさい、もうしません」
とふるふる震えながら土下座するのだった。

以降、ゼロは学院で教師をしている間、全校生徒及び教師たちが
ら別の意味で魔王の肩書を付けられることになるのだった。

「ここがゼロの職場ですね」

「なありユイ。ゼロの邪魔になるだろうから、オレたちは行かない方がいいんじゃないか？ それにリュイは依頼が入っていたはずだろ？」

「そうですね。指名されてるし比較的簡単な依頼だけど依頼料高くてお得だから断らなかつたのですけれど！」

「オレ、何気にリュイがお金大好きだつてわかつてたよ」

「金は天下の回りもの！」

拳を高く握り締めて言う言葉じゃないとシキは思う。誰もが見惚れるほど神秘的な美しさを兼ね備えたハイエルフなのに、その唇から零れる言葉はとても即物的だ。

「ゼロがちゃんと講師やつてるのを見て笑ってやろうかと思いましたが、時間がありませんもの。代わりにシキがしっかり見てきてくださいね」

「えっ」

手を重ね合わせてにつこりと微笑むリュイに逆らう術を今のシキは持っていなかった。まるでドナドナの仔牛ように引きずられ、学院の受付にて手続きをされ、ゼロが出てくるまで受付前で待っているしかない。

数分後、廊下の奥から苛立ちを隠していない様子で多くの生徒たちにつき纏われたゼロが出てくる。しかし、その互いの金瞳が合うと彼は口元を綻ばせ、甘さを含ませた声でシキの名前を呼んだ。

「ゼロ、わたくしもおりますのよ？」

「あ？ 悪い、シキしか目に入ってなかった。つか、お前仕事あるんだろ。さっさと行け、さっさと」

まったく悪びれた様子を見せず、追い払うかのような仕草をするゼロに、リュイの頬が引き攣る。

「あー、リュイ。ゼロの仕事っぷりはオレがすっかり見ておくから仕事行って来い。ワイン買い足しておくから」

「仕方ありませんわね。仕事があるのは事実ですもの」

ふう、と一つため息ついてリュイは一言二言何かをゼロに耳打ちし、ゼロが頷いたのを見て学院を出て行った。

「シキ」

「ん？」

「案内するからついてこいよ」

「ああ」

シキは手招きするゼロの隣に並び、一緒に歩きだす。その光景に周囲の生徒たちは異様なものを見たとはかりに表情を引き攣らせているのだが、シキは見ないふりをした。聞いてしまえば、後々面倒なことに関わりにならないという予感がしたからだ。

「ゼロ、ここで魔法を教えているって言うってたけど……」

「ああ。魔法というか、魔法による戦闘だな。あとは前帝国史だな」

「前帝国史？」

「俺達がプレイしていた時代のことだ。まだ王国だった時代の歴史。あの時、大体俺らがプレイしていたのは、版合わせて二百年前後。この時代では戦乱の時代と言われ、詳細がわかっていねえんだよ」

「そこにその当時を生きていたとされるゼロが現れ、ギルドに所属してるとすれば依頼が来るのは当然か。魔法も使えるしな」

「そういうことだ。俺としちゃ、報酬が高くなきゃやりたくねえ依頼だ。面倒くせえ」

「お前、家庭教師とかしたことねえの？」

「ない。俺、人に教えるの苦手だし」

「そうか？ オレにいろいろ教えてくれたじゃないか。結構わかりやすかったぞ？」

「あー、それは、まあ、いろいろと」

言葉を濁すゼロに、シキは首を傾げる。

「……気にすんな」

「あ、ああ」

ぼん、とシキの頭を軽く叩いてくるゼロの行動は明らかにおかしいのだが、これ以上は聞いて欲しくないという空気を出しているので、シキは口を閉じた。

「話は変わるが、お前の魔法戦闘にこの学院の生徒たちはついていけないのか？ お前、魔法だけじゃなくて体術もかなりのもんだろ」

「一応ちゃんと考慮はしてる。さすがに死人出すわけにはいかねえし」

「ふうん」

「シキが来てくれりゃ、魔法剣士志望の奴に当てるんだけどな」

「無理。オレも人に教えるの苦手」

他愛もない会話から、学院内のことに関することまで話し合う二人の空気は柔らかい。しかし周囲にいた生徒達がゼロを見るたびに廊下に張り付いて道を開ける様子に、さすがのシキも耐え切れず、自分より頭一つ分高い彼の顔を見上げて問いかけた。

「ゼロ、お前この学院の生徒たちに何やったんだよ。すごく怯えてないか？」

「いろいろとやかましかったことがあったからシメた」

「……………死人は出てないんだよな。じゃあ、いいか」

『確かめる所が違います!!』

それまで二人の会話を聞いていた生徒達が、どこかずれたシキの突っ込みに、一斉に突っ込むのだった。

学院内の広大な広さを持つ食堂。その一角に二人はいた。周囲から視線を浴びていることにゼロは眉をひそめつつ、メニューを眺めるシキにどれがお勧めかを教えている。

上流層の生徒たちも多いことから、学院の食堂メニューは豊富でどれも味に煩い料理人達の手によって作られている。

「食堂って言うより、レストラン並みだな。それもファミレスとかじゃなくて、銀座あたりにあるレストラン」

「えらくピンポイントだな、おい。まあ、否定はしねえけど。で、どれにすんだシキ」

「……アースラーグの煮込みハンバーグ、のセット」

「よっ」

シキが決めたのを聞き、近くを歩いているウェイトレスに注文する。しかし、ウェイトレスは彼の顔に僅かに頬を染めて注文を聞いておらず、小さくため息をついた。そうするとウェイトレスは我に返り、急いで注文をメモに取りカウンターへと小走りで向かった。

「ちゃんと仕事しろってんだ」

「それは仕方ないだろう。お前やリュイの顔は目を惹くんだから」

シキはそう言うが、ゼロにとってはシキこそ目を惹くと思っている。

さらさらとして、触り心地のよさそうな桔梗色の髪。ゼロの外側にハネているのは違い、シキの髪はストレートだ。

猫のような大きなアーモンド型の瞳は、同じ金色に輝いてはいるが、わずかにシキのほうが深みがあると思っている。

顔立ちも整っていて、男らしいとは言いがたいが女顔というわけでもない。男よりの中間と言ったところか。

職業ゆえか、立ち姿はまっすぐとしていて、遠目から見ても綺麗で目を惹いてしまう。

陣羽織コートの上からでもわかるが、コートを脱いでいる今ならより一層細身の体が強調されている。特にその抱きしめると折れそうな細い腰と、吸い付きたくなるような滑らかな鎖骨のライン、髪の間から見える白さがよくわかる項はゼロのお気に入りでもある。

「ゼロ、お前真昼間からエロい顔になっているぞ」

「あー、よく言われるな。まあ、リアルでもエロい顔と声が人気でしたから」

「イケメン爆発しろ」

そこへ二人の生徒たちが必死な顔で駆け寄ってくる。

「ゼロ先生！」

「ああん？」

「態度悪っ!?!？」

「当たり前だ。シキとの飯の時間邪魔しやがって」

「別にいつも食べてるじゃないか」

「……気持ちの問題が、気持ちの」

まったくもって気づいてくれないシキにゼロは大きなため息をつく。そして近付いてきた生徒たちに向き直り、「用は何だ」と問いかける。

「先生この後講義ないですよ。出来たら演習場で俺たちに魔法と剣術教えてほしいんです」

「来週野外実習なんですけど、あんまり自信なくて」

「だから教えてください。お願いします」

「面倒くせえ」

「「せんせえ、お願いします」!?!?!」

「だから俺はこれからシキと過ぐ」

「いいじゃないか。教えてやれば」

「シキい？」

「オレもちゃんとお前も教師っぷりを見てみたい。きつとかつこい
いんだろうな」

「よし。お前ら昼飯食い終わったら演習場に集合だ」

「「はいっ」「」

お手軽だと思われても、ゼロはシキにかっこいいと思われていた
のだ。むしろそのまま惚れてくれればそのまま天国にいけるとゼ
ロは思う。それほどまでにゼロはシキを気に入り、惚れ込んでいた。

だがこのときゼロは知らなかった。

周囲の生徒たちがこの会話を聞いて午後に授業のない生徒たちが
演習場に詰め掛けてくることを。そこで一種のライバルが出来るこ
とを。

ゼロが隣で大きなため息をついていることに、シキは苦笑する。

「なんでこうなった」

「人気者だな、ゼロ。相棒としてオレも鼻が高い」

二人の目の前には十数人の生徒たちが剣や杖を持って集まっていた。

「なら相棒からのお願いだ。剣術はお前が見ろ」

「はあ!？」

「協力したらこの学院長からせしめたパーティ酒やる」

「乗った! お酒、お酒」

リュイに劣らず酒豪なシキは、めったに呑めない高級酒を思い描いてぺろりと唇を舐める。

「エロっ……」

「ん?」

「何でもねえ」

ゼロは一つ息を吐いてから、上空に向けて一発放つ。その音で、

一気に騒いでいた生徒達は沈黙した。もう少し煩かったら誰かの足元に発砲されていたなとシキは思う。

「今日の訓練は、魔法は俺で剣術はこいつが担当する」

ゼロの言葉に剣術目当てだと思われる生徒たちがブーイングを起す。シキは近くに落ちていた小石を空へと放ち、無造作に刀を抜いて振り下ろす。すると小石は綺麗に真っ二つに割れていた。

「さすがだな、シキ。お見事」

喉を鳴らして笑うゼロに、シキも笑みを浮かべる。

「さてお前ら、どうする？」

笑みを浮かべたまま、剣術志望の生徒たちに問いかけるゼロ。生徒達は一斉にシキの前に立ち、「お願いします！」と叫びながら頭を下げた。無論シキとて鬼ではなく、出来る限りのことを教えていく。

基本的に刀を使うサムライであるシキと、騎士を目指す生徒たちでは型自体が違うので、シキが教えるのは簡単な理論とフォームを見て力の入れ方を教えるくらいだ。

「もう少し左足に力を入れて腰を落とせ」

「はい……あ、楽になった」

「そうか。だが、その剣は君に合っていないんじゃないか？ 重いだろう」

「それはわかっているんですけど、これは兄が入学祝にくれたもので、どうしても使いたいです」

「ふむ……なら全体的に筋力をつけるのがいいだろうな。筋肉がつけば腕が落ちてくることもないと思うぞ」

「素振りなら毎日やっています」

「素振りはしばらくやめて、基礎的な筋トレを繰り返したほうがいい」

「筋トレ、ですか？」

「ああ。腹筋、背筋、腕立て伏せ、スクワットが妥当なところか」

「……結構きついですね」

「最初は少ない回数でいいんだ。徐々に回数を増やしていけば。でも来週が実習だから時間がないな……」

「やっぱり剣を変えなきゃダメですか？」

「仕方ない。裏技を使おう」

「裏技？」

シキはその場に生徒を置いてゼロの元に向かう。ゼロといくつか話をし、また元の場所に戻ってくる。

「これで当日はなんとかなるはずだ。ただ……」

「ただ？」

「後日若干筋肉痛で動けないかもな……」

「はあ……まあ、それくらいなら」

その後もいくつかのことを教えて、次の生徒に移る。何人が教えたと休憩を取っていると、視界にゼロが指導している姿が目に入ってきた。

「うーん……指導してる姿もイケメンだな。腹が立つ」

詠唱がうまくいかない生徒に、詠唱に魔力を乗せる方法を教えたり、魔法の発動がうまくいかない生徒に精霊との付き合い方を教えたりとなかなか様になっている。経営学を学んでいることから、人の動かし方や観察眼に優れているとは思っていたが、それが指導という形に表れていることに軽く驚いた。だが、初心者だったシキにアルカディアオンラインでの過ごし方や戦闘を教え面倒を見てくれたのが彼だったことを思い出し納得する。

（ゼロはなんだかんだ言って優しいからな。面倒見のいい兄貴分って感じた。年下だけど）

常に前へ前へと引っ張り、躓きそうになったら足を止めて待っていてくれる彼にシキは何度も助けられてきた。

（改めて今度御礼でもするか）

そんなことを考えながら、刀を持って再び生徒たちに向き直り指導を始めた。数時間後にはすっかり日も暮れ、生徒達は帰宅ないしは帰寮の時間となってしまう。

「今日はここまで。帰ったらゆっくり休めよ」

『ありがとうございます！』

ぼろぼろの風体であったが、生徒達はどこか満足したような顔で演習場から去っていく。

「ゼロ先生、シキさん。今日は本当にありがとうございました！」

「すごく勉強になりました！」

「そうか」

「じゃあ来週の實習、総合でA取れよ。俺がここまでやったんだ。じゃないと……わかってるよな？」

「は、はい……！」

「ゼロ、いたいけな学生を虐めるな。この馬鹿の言うことは放っておいて、あまり気負わずいつもどおりいけ。自然体が一番」

「はいつ……！」

元気よく答える二人を見送った後、シキたちも定宿に帰る支度をする。

後日、生徒二人が涙目で総合成績B+という結果を持ち込み、ゼ口による恐怖のお仕置きこと、学院内で最も恐れられる生活指導教師の鬘疑惑を調査せよが下されるのだった。

11 (後書き)

次回から新展開予定。

ちなみにキャラのビジュアルというか、髪型なんかは私の好きな某アイドルさんイメージ。とはいいつつも、彼らはひよひよひよ髪型が変わるのでお気に入りを決めるのが大変…… (笑)

不動の一位は共演した某ドラマの二人です。わかる人はわかります。むしろ分かった方、お友達になってください。

異世界トリップともいえるべき現象に遭遇してから一年弱。シキたちはゼロの講師依頼の期間が終了したのち、拠点として王都の一角に小さな一軒家を買った。

そして着実に依頼をこなし、早々のランクアップをするべく保有ランクより上のランクの依頼を受けては遂行するということを繰り返した結果、一年も経たないうちに三人はランクAにまでなった。

脅威のスピードでランクを上げ続けたことに疑問を持った者たちが、ギルドの監査機関に不正ではないかとの訴えを起こし、それを受けた監査機関が三人に監視をつけた時期もあったが、依頼の遂行スピードやその実力を認められ、不正なしとの折り紙つき。また、このあたりで一度土の味を味あわせてやろうとしたシキと同じ竜族
火竜族 のS級冒険者が、五分と持たずにシキの前に倒れた。

パワー重視と炎を操る火竜族に比べて明らかにシキはパワーが劣る。しかしそれをテクニクとスピードでカバーし、相手が剣を振り下ろす前に懐に入り込んで風の塊をお腹に叩きつけたのだ。風の塊は渦を巻いていて、まともに入ると内臓にまでダメージが及ぶ。それほどまでにシキの風の魔法は威力があり、たとえ強靱な肉体を持つ竜族でも、人型であれば一発で意識が飛ぶ。

ゼロは使い手のほとんどいない禁術級の魔法を、軽々と短縮詠唱

で操り集団で襲い掛かる獰猛な魔物達を瞬殺し、ボスのサイクロプスと呼ばれる一つ目の巨人をガンブレードで一刀両断。そのまま一緒にいたサイクロプス二体も撃破。

リュイは疫病に冒され、次々に住人たちが亡くなりゴーストとして徘徊するようになった死の町と呼ばれる場所を、精霊たちの協力を得て浄化。神木を植えては成長促進の魔法をかけ、精霊の拠り所とした。これによって徐々に緑溢れる町となる。

これらの出来事がきっかけで、三人は冒険者たちに一目置かれる存在となったのだった。そんな彼らに王都のギルドマスター直々に依頼が下される。

「竜の谷に咲く月の雫？」

「うむ」

「聞いたことあるか、リュイ」

「いいえ、聞いたこともありませんわ。一体どういうものですか？」

「最近はめつきり咲いている場所も減ってしまったからのう。月の雫は通称で、正式な名前はアキレアじゃ」

「ああ、ポーシヨンの材料か」

ぼん、とシキが納得といった手を叩く動作をする。

「……おぬしら、ポーシヨンの材料にアキレアを使っておったのか？」

「まあ、雑貨屋で売ってたし、そこらの道に生えてたしなあ。そういや今のポーションの材料はソルト水とコロネリアか」

「コロネリアとかよくドロップしたけど、使い道なさすぎて捨てるしかなかったただの雑草」

「ですわねえ。それが今となっては立派にポーションの材料。成長しましたわ」

しみじみと語る三人に、ギルドマスターの頬が引きつる。

「コ、コロネリアが雑草……」

「アキレアだって、ポーションの材料にならなけりゃ雑草扱いだったな。そういえばゼロ、お前いくつか持ってなかったかアキレア」

「なんじゃと!? 持っておるのか!?!」

「ねえ。今の時代のポーションと比較するために使ったからな。アキレアで作ったポーションならばあるぜ?」

「ダメじゃ。アキレアの花びらが必要なんじゃ」

「それで竜の谷に行けと?」

「うむ。これは公爵家からの直々の依頼での。本来であればS級以上の者に行かせたいのだが、今王都の近くにS級以上の者はおらん。頼む、行ってくれ」

三人、特にシキはかなり難しい顔をしている。

出来ることなら同属である竜族にはあまり関わりたくないシキだ。火竜族の冒険者との戦いにおいても、出来るなら関わりたくなかったほど。竜の谷というところは竜の生息地で、竜族の多くが生息している地域だ。その場所と竜族全てを統べるのが竜王と呼ばれる竜。そしてその竜王すら頭を垂れ、あらゆる竜と名のつく存在から神聖視されているのがシキの転生後の種である始源竜だ。下手に関わればシキの正体がばれて、可能性として芽づる式にゼロとリュイもばれかねない。

「……ちなみに断つたらどうなるんだ？」

「そうさのう……わしと公爵家からの評判が悪くなる上、アキレアの無断使用で牢屋行きじゃ」

「……はあ!?!」「」

「アキレアはのう、王家の許可なく採取及び使用出来ぬ保護植物なんじゃよ。まあ、先ほどの発言は500年引きこもっておった者の戯言として流してやらんこともないが……」

「このくそじじい……!」

「別に牢屋行きだとしてもすぐに脱獄は出来ますけど、後々面倒ですわねえ……」

「受けるしか、ないな」

大きなため息をついて、正式な依頼書を発行。必要経費として払

われた前金を仕舞って竜の谷までの地図をもらっつ。

だがここで問題が発生。

竜の谷近くの村まで行く荷馬車は翌日の朝に出発する。その次の場所は二週間後。しかし、翌日リュイは指名依頼が入っており王都を離れることは出来ないでいた。

「わ、わたくしだけ置いてけぼり……」

「仕方ねーだろ。お前に指名が入ってんだから。しかも常連。ま、俺とシキでちゃちゃっと済ませてくるからよ」

どこか機嫌の良さそうなゼロを見上げ、シキは首を傾げる。するとゼロの手がシキの頭にぽん、と乗る。

「久しぶりの二人旅だな」

「……ああ、そうか。最初の頃を思い出すな」

まだリュイとパーティを組む前、ゲーム内ではゼロとシキ二人だけで行動を共にしていた。三人はアルカディアオンラインが正式稼動する前の版からの付き合いであるが、やはりゼロとシキで最初からコンビを組んでいた分、そちらのほうが付き合いは長い。

「あそこでお前に出会わなかったら、オレはここまでこれなかっただろうな。最初に組んだのがお前でよかった」

「シキ……」

頬を緩めて優しい笑みを浮かべるシキに、ゼロも同じように笑みを浮かべる。二人の間に和やかな空気が流れるのとは反対に、リュイは落ち込んだ様子でため息を吐いた。

「仕方ありませんわ。今回はシキとゼロにお任せいたします。気をつけて行ってらっしゃいませ」

「ああ」

「わかってる」

ギルドマスターとリュイの見送りを受けて、二人は竜の谷へと旅立っていく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9751s/>

遙か樂園のその先で

2011年10月15日01時47分発行